

『能ハムレット』マンチェスター公演

“Noh Hamlet” in Manchester

ハウズ 優子

HOWES Yuko

Abstract: Japan Society North West, a non-profit organization in the North West of England, enjoyed a special opportunity to host *Noh Hamlet* in Greater Manchester at the end of 2012. The Chairman of the Society and Professor Ueda's son, Miho Munakata, worked together to make this event happen in a very short period of time. Despite the short notice, many people from various parts of England came to see Professor Munakata Ueda's performance at a modest village hall. Although many of the audience had no previous exposure to Noh, with the help of an excellent English-Japanese bilingual script by Munakata, the performance was well received, and gave them a new insight to more deeply understand Hamlet. "By living in the present future, you may transcend this world, you may transcend present time; the readiness is all." These words of "satori" or enlightenment of *Noh Hamlet* seemed to illuminate the way to live in this unpredictable world.

Key words: Manchester, Japan Society North West, Japanese traditional culture, "Noh Hamlet". マンチェスター、英国北西部日英協会、日本の伝統文化、“能ハムレット”

私はイギリス、マンチェスターで、「英国北西部日英協会」という非営利団体の会長をしているが、この団体は、在英日本人のためというよりは、日本文化に興味のある英国人のためのようなもので、会員も英国人のほうが圧倒的に多い。もともとは、マンチェスターにある日本料理レストランを食べ歩く、インフォーマルな会であったらしいが、それが会員200名ぐらいの、れっきとした協会へと発展した。この協会ではほぼ月に一回、いろいろな日本文化関連のイベントを催し、英国人に日本文化を知ってもらうように努めている。今までの主なイベントとしては、有名な講師を招いた講演会から、実際に会員の人を楽しんでもらう生け花ワークショップ、書道ワークショップ、太鼓ワークショップなどがある。ただ、ロンドンと比べてマンチェスター近辺に住む日本人は格段に少ないので、人材不足で、ワークショップの講師は、たいていの場合が地元の英国人であったりする。日本人の私としては、その技術のレベルに不満な事も多々あったが、それでもそのような英国人が地元が存在する事の方に感謝する事にしてきた。

そんな私が、上田先生がヨーロッパにいらっしゃるので、この機会にマンチェスターでも『能ハムレット』の公演はいかがですか、という趣旨のメールをいただいたのは、私がたまたま一

時帰国で東京のホテルに泊まっている時だった。私は恥ずかしい事に、上田先生のことも全く存じ上げず、『能ハムレット』といわれてもピンとこなかったという事を白状せざるを得ないが、それでもその短いメールから、これは素晴らしい、またとない機会に違いないと判断し、すぐに、ぜひやりたい、とメールで返事をした。しかし実をいうと、その時点では、どうやってそれを実現させるかは、まだ皆目わかっていなかった。

10日ぐらいして、私はマンチェスターに戻り、いよいよその公演の実現に向けて動き出すことになった。しかしながら、上田先生がいらっしゃる日程が、12月の半ば過ぎということで、それまでにはもう一ヶ月と少ししか残っていなかった。そんな短期間で適当な会場を見つけるというのは至難の業で、おまけに、私どもの協会が非営利団体であり、非常に少ない資金で運営しているという事も、その困難に輪をかけた。さらには、12月の半ば過ぎというと、こちらではクリスマスパーティの予約でもうすでにいっぱいになっているところも多かった。私はだんだん自信がなくなってきた。そして、上田先生が、白足袋で歩けるきれいな舞台と、橋掛りがある、とおっしゃった時は、正直言って、もうこれは無理だな、と思わざるを得なかった。でもここでせつかくの公演の機会をだいなしにしてしまうなんて.....ましてや先生には、もうすでに OK と言ってしまった.....気を取り直して私が何とか見つけられたところは、マンチェスターから車で30分ほどいったところにあるコミュニティセンターで、舞台はもちろんないし、広さ的には何とかなるが、古くて外観も悪い会場だった。ここではだめだろうなあ.....さすがに悶々としていた時、上田先生のご子息、宗片方邦（むなかた・みほう）さんから助け舟がやってきた。

方邦さんは、マンチェスター南部にお住まいで、ご自宅の近所にある教会のホールを会場として見つけてくださり、素晴らしいことに、橋掛りなどの舞台の手はずをどうしたらいいか、という事まで考えてくださった。その会場にも橋掛りはもとより普通の舞台もなかったが、方邦さんのアイデアで、それらしく見えるようにフロアに手を施して、まあ、これなら何とかやれる、というところまでこぎつける事ができた。

会場が決まらなないと宣伝もできないので、それは気を揉んでいたのだが、やっとポスター、インターネットなどで宣伝を開始することができた。そのお陰で、マンチェスターからかなり遠いところに住む人たちからも出席の連絡があった。平日の夜の公演だったので、来にくい人が多いのでは、と心配していたのだが、それなりの出席希望者が集まり、ほっと一息。実際、地元の人よりも、遠くからの人たちの方が多いぐらいで、しかもその人たちは、公演に来るためにはホテルに一泊しなければならないにもかかわらず、喜んで来てくれるのだった。やはりそれは、上田先生の『能ハムレット』という試みが、いかに珍しく、他の誰も考え付かない、素晴らしい試みであり、人々の知的好奇心をかきたてるものであったか、という事を端的に示すものであるだろう。

さて、いよいよ当日になった。会場準備のために開演時間より1時間ぐらい早く着いてみる

と、会場になる部屋のまん前の廊下で、パーティの準備がされている。はて、なんと粋な計らい、とテーブルの上に広げられたワインやオードブルなどを眺めていると、他の部屋からご年配の奥様方がどわどわと出てきて、それは自分たちのためのパーティの支度だと言う。ええ？でもこんなまん前でパーティをされたら、会場内までその騒ぎが聞こえてしまうのでは.....私はそのご婦人たちに、なんとか静かに飲んだり食べたりしていただけないかと頼んだが、「まあ、何を言っているの。私たちのブリッジのグループは、もうずいぶん長い間、毎週ここでブリッジの会をしているのよ。どうして私たちが静かにしなくちゃならないのよ。」「そうよ、まさか、この壁を通して音が聞こえるような事はないわよ。」と相手にしてくれない。ひたすら、その壁の断音効果を期待するのみだった。

いうまでもなく、この会場はいわゆる急場しのぎのものだった。上田先生には、りっぱなホールで公演をさせていただきたかったし、ましてや遠くからわざわざ来ていただく方々に、ここへ来て、え？何ここは？と思われたくもなかった。それでも、この公演を、ここマンチェスターで実際にやれる、という事の方が大事だった。体裁を気にして、完全でなければやらないというよりも、少しぐらい小さくて不完全な会場でも、イギリス人のみんなに先生の『能ハムレット』を見てもらえることにこそ意義がある、と信じた。そして、紆余曲折の結果、やっとこうして開演にこぎつけられたことを思うと感無量だった。だがそんな感傷に浸っている暇は全くなく、次々とお客さんがやってきた。一人一人に挨拶をし、来てもらったお礼をいい、席についてもらった。

私が簡単な挨拶を述べ、上田先生をご紹介したあとで、先生は、観客のみんなに、ここはみなさんの想像力を存分に使ってもらえる、またとない機会である、とおっしゃった。つまり、立派な舞台があるつもり、先生は能装束をお召しになっているつもり、オフィーリアの着物が床においてあるのを見て、オフィーリアが横たわっているつもり、で観てください、ということだった。みんなは少し狐に包まれたような顔をしていた。そして先生の『能ハムレット』は始まった。

日本人といえども、私は能の専門家ではないし、その上、シェークスピアにも精通していないので、わかるかどうか少し不安であったが、先生の落ち着いた演技で、十二分に楽しむことができた。能の謡いのリズムで英語が謡われるのはとても興味深かった。私はイギリス人の観客のみんながどう思っているだろうと思った。幸い、先生が事前にくださった脚本をプリントして観客に配っておいだったので、みんなもわかってくれているはずだった。その証拠に、先生の演技が終わったあとの質疑応答の場面では、活発な討議が交わされた。

私は公演のあとで、観客のひとりひとりに、コメントをいただけないかと頼んだ。以下は、そのうちの何人かからいただいたコメントを日本語に訳したものである。

「シェークスピアによる英語のせりふを日本の謡いで演ずるとは、なんとユニークで面白い試みでしょう！」(Jane Sunderland さん)

「上田先生の演技には、すごい集中力と、存在感を感じました。先生のお声はとても力強く、同時に暖かく豊かでした。シェークスピアの作品が、このように日本の能になって演じられるのを見るのは全くの驚きです。先生の演技は観客をハムレットの真髄へと導き、今までとは違った、もっと心理的な部分の理解ができるようにしてくださいました。先生の、親切で、寛大、親しみやすい上に知識にあふれたお人柄は、観客みんなに喜ばれたと思います。」(Nina Kane さん)

「西洋と東洋の伝統的舞台が、お互いをいっそう高め合った舞台だったと思います。大学で『ハムレット』を勉強していた時は、ハムレットの、芝居がかった、わざとらしい振る舞いに、いつもいらいらしていたものです。それが、上田先生のハムレットは、ずっと思慮深く、自分がどうすべきかについて熟慮し、自分自身の死すべき運命を許容していたようでした。そのおかげで、私は初めてハムレットの劇を楽しむことができましたが、それは主に、先生のカリスマのせいでしょう！間に合わせの舞台であったにもかかわらず、先生の動きは優雅で、何度も聞いたはずのハムレットのせりふも、扇と荘厳な舞いのせいか、物珍しく、美しく聞こえました。能の事は殆ど何も知らなかったにもかかわらず、私は、ハムレットが、とうとう自分が死ぬという事実を受け入れる場面に陶醉していました。」(Lorna Petty さん)

「上田先生の、物静かで穏やかなお人柄が、一番の魅力でした。」(Tony Martin さん)

「文化というものは、国によって、こんなにまでも違うのだ、という事を知るのには本当に素晴らしい経験でした。私の祖父は、第2次世界大戦で戦ったので、日本と英国という、当時の敵国同士の文化が、このようにして近づいた、と感じる事ができたのは、私個人として実に充足感を感じられる出来事でした。そして、私の娘の世代には、二つの文化はもっと近づいていくでしょう。」(Hugh Foster さん)

これらを読んで、私は、このイベントを開催にこぎつけるまでの苦労は報われた、と思った。観客のひとりひとりが、それぞれの人生に照らして、先生の『能ハムレット』を十分に理解し、楽しんでくれた、と思えた。私自身、先生の『ハムレット』の対訳台本を拝読して、その日本語訳の素晴らしさに深く感銘を覚えていた。先生の『能ハムレット』の中では、ハムレットは、深い瞑想のあと、悟りにいたる。

「生きるか死ぬかは最大の問題ではないのだ。今この時を生きること、それこそ唯一の生き方なのだ。前兆に挑戦するのだ。未来に向けて今この時を生きるとき、この世を、そして今という時を超越できるのだ。」

私はこれこそが、混沌とする現代での、究極の生き方を示唆するものであると深く信じてやまない。